第 2 章　熟慮の段階

1. 熟慮段階における参加者の回答

これまでの熟議においても、テーマについてグループで議論する前に、個人でテーマに関する内容を熟慮する“宿題”、事前学習課題が出されている。今回もテーマについて熟慮していく上で、重要と思われる点、安心・安全を創ることを熟慮するために要する、加古川地域を中心としての資料をあらかじめ参加者の方々に提示している。今年度のテーマは「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」。このテーマに基づいた宿題（熟慮）は、回答 1 の“あなたにとって地域の「ちから」とは何でしょうか？”から回答 11 の“安心して暮らせる地域にするためには (2) あなたなら何をしますか (何ができますか) ？”まであった【図 2-1-1】。ここでは、設問ごとに参加者が回答した意見についてまとめてみたい。

図 2-1-1

回答 1　あなたにとって地域の「ちから」とは何でしょうか？【図 2-1-2】

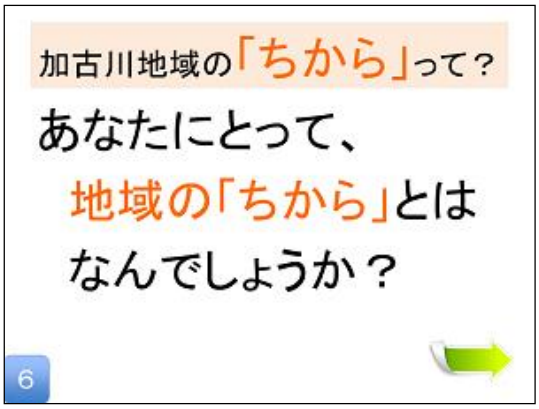

図 2-1-2

加古川地域に住んでいる住民が地域の課題解決に向けて議論する、コミュニケーションを図る、解決に向けて行動する、このような点が地域の「ちから」であるという回答が多く見られた。このような意見が多く見られた背景として、加古川地域においてはボランティア活動や祭りなどの地域活動に対して熱心に取り組む人が多い、地域間の連携が強いといった住民の団結力の強さと考える参加者が多いことも関係していることが推察される。その他、「加古川地域の「ちから」は自然や歴史などの魅力」、「新しいことにも挑戦できる勇気とそれを受け入れる包容力」といった意見も出された。

回答 2　「安全」とはどんなことでしょうか【図 2-1-3】

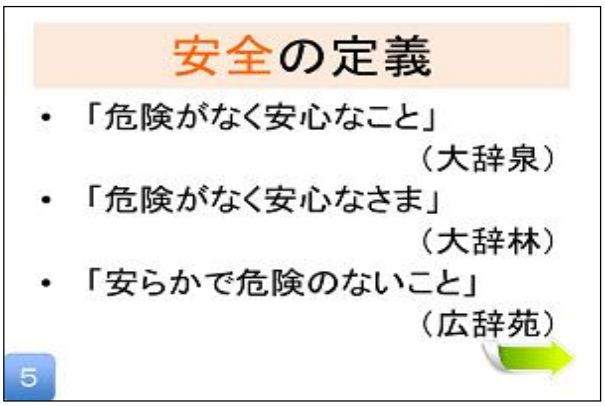

図 2-1-3

回答 2 は「安全」という語彙について参加者の言葉に対する意見を求めた。参加者の所属によって「安全」という言葉に対するイメージは異なる傾向にあった。例えば、高校生や大学生については、「自分の身に危険が及ばないこと」「危険な状態ではないこと」という危険を感じることなく安心して暮らせる環境が確保されている状態が安全であると考えている意見が多いようである。一方で、大学生を除いた 20 歳以上の参加者については、様々な危険に対するリスク対策について考慮することが安全に繋がるという考え方が多いようであった。例えば、安全とは「生命の危機を事前に察知して回避すること」「危険を回避するために何らかの対策を行った状態」という意見が代表的なものである。

回答 3　「危険」とはどんな危険でしょう？「損」とはどんな損でしょう？【図 2-1-4】

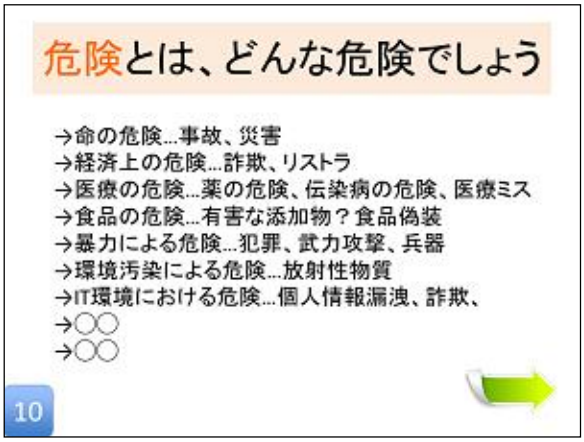

図 2-1-4

ここでは参加者の感じる「危険」について具体的に意見を求めた。「危険」とは、自然災害などの環境的要因、または、事故、事件、犯罪など主体的要因によって自分自身の身体や生命が脅かされることと考えている参加者が多い。また、「皆が幸せを感じない状態」を危険と考える参加者もいた。一方で、「危険がない状態」として、人や物などに対して危害の発生する恐れがほとんどない状態、身体や命に害をなす要素がない状態と考える参加者も見られた。加古川地域に限定して考えた場合、「危険」よりも「危機」ととられるほうが適切であるというコメントもあった。「損とは」という意見については、「金銭や財産といった財政的な不利益によるもの」のほか「自分が被害を受ける」「自分が利益を得られない」といった意見、「自分だけが幸せを感じないと思う心」「自分の中では納得できないもの」「大切なものを失うもの」という意見もあった。

回答 4　「安心」とはどんなことか、自分の言葉で説明してみましょう【図 2-1-5】

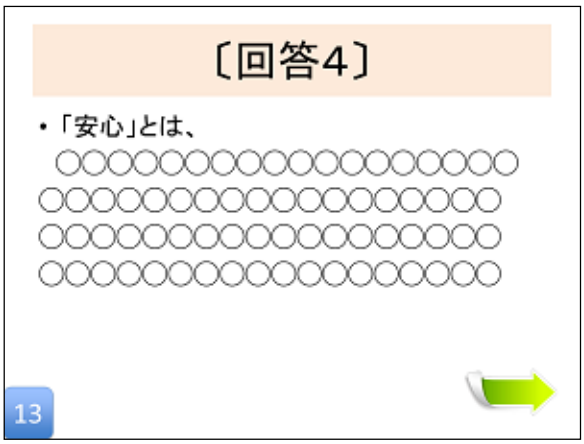

図 2-1-5

安心とは「心の落ち着いた状態」「人が幸せを実感できる状態」「誰もが不安なく生活できること」など心配や不安のない状況であったり、「災害などによって生命や資産などが危険にさらされていないと感じている状態」が、すなわち安全だと考えている参加者が多いようである。ただし、安心の尺度は個人によっても大きく異なることから、精神面も含めて安全な状態であり、安心よりも広い概念として捉える必要もある。例えば、警察など困ったときに助けてもらえる環境
がある、信頼できる相談者が周りにいる、信頼できる人たちが仕事をしてくれるといった誰かに守られている環境にあることが安心な状態であるとも考えている。

回答 5　「安全」と「安心」はどう違うのでしょう【図 2-1-6】【図 2-1-7】

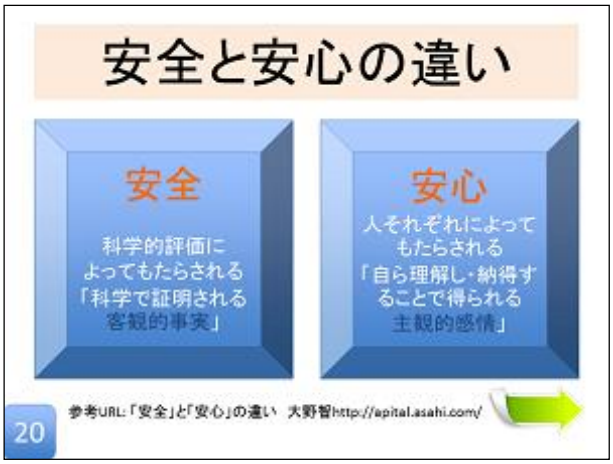

図 2-1-6

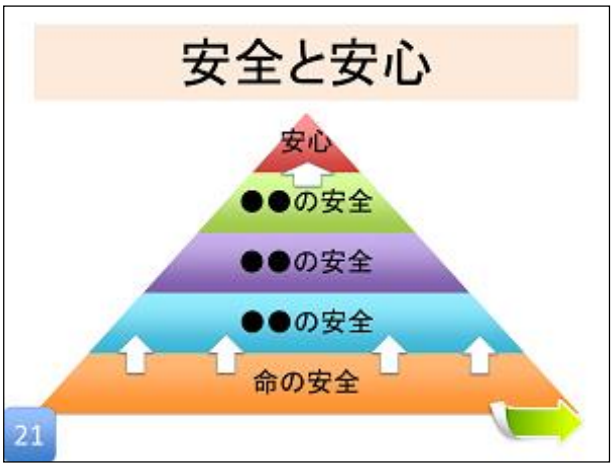

図 2-1-7

「安全」は客観的にみて危険がない状態であり、「安心」とは危険がないことで得られる心の状態、主観的にみて危険がない状態である。「安全は人が目に見えてわかるもの」「安心とは人には見えず自分自身の心が感じるもの」と、安心は施設の整備などで造りあげることができる。一方で、安心は個々の心情であるため安全であるから安心であると考えることもできる。このような点から、安全はリスクの大

小で数値評価することも可能となるが、安心については人間の感じ方であると考えられることから、人によって評価が異なる。安心は身体に関して害のないこと、すなわち、身体的な部分、安心とはメンタルな部分での不都合な状態がないと考えている参加者も見られた。「安全とは個人、グループ相互の相手との協調性」、「安心とは、健康、財源、生活力」、「安全とは、身体に関して害のないこと、安心とは心に関して害のないこと」、「安心とは危険なものがないことで得られる心の状態」という意見も挙げられた。

回答 6　今住んでいる地域に暮らすなかで「安全でない」「安全が感じられない」と思った事がらや経験がありますか【図 2-1-8】

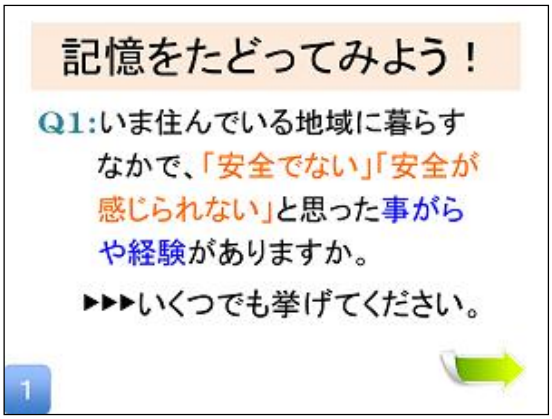

図 2-1-8

これまで行われた熟議においても度々議論されていた内容でもあるが、交通事故の多さ、犯罪率の高さという点で安全が感じられないと回答しており、特に高校生、大学生を中心に複数の参加者がこの点を指摘している。人間の交通行動を規制している要因として、人的要因（主体要因）によるものと環境的要因によるものがあることが指摘されている。高校生や大学生は安全運転義務違反に関連するような運転者のマナー、すなわち人的な要因が路上での安全を感じさせないことにつながっているようである。一方で、20 歳以上の参加者については、同じ交通に関しても道幅の狭さや交通量の多さといった環境的な要因に問題を感じているようである。また、交通に関する意見と合わせて、地震や津波、河川や用水路の氾濫などの自然災害に対して、安全を感じられないという意見も多く見られた。東播磨地域にはため池が多く存在していることから、震災などによるため池の崩壊について意見もあった。高校生と大学生の中に、街灯の少なさを指摘する意見が多く見られ、不審者に関連する点について指摘する意見もあった。

回答 7　「安全でない」「安全が感じられない」ことに対する解決方法や対策案を書いて下さい【図 2-1-9】

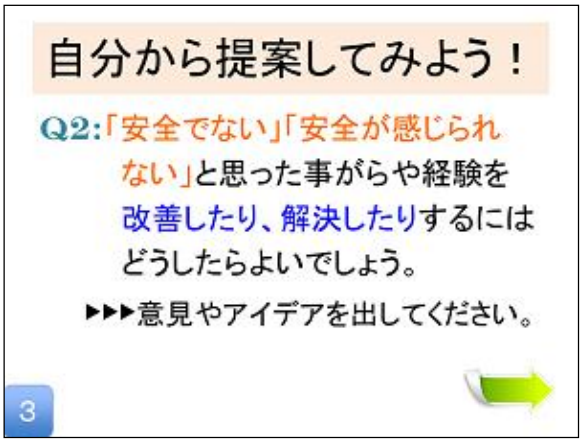

図 2-1-9

「安全ではない」「安全が感じられない」ことに対する解決方法や対策案についてコメントを求めたところ、回答 6 に関連して、自然災害、交通マナーと防犯対策の 3 点に意見が多く集まった。この 3 点は共通して、解決には地域住民間のコミュニケーションや意識の改革などが重要であると考えている参加者が多い。自然災害については、避難場所の確保、水路の整備、その他に公共事業を増やすことが解決につながるという意見であった。交通マナーについては、信号機、ガードレールや標識、案内板といった設備改善の必要性、防犯対策については、防犯カメラや街灯（青色 LED 街灯など）が解決の方法や対策案として述べられている。また対策案について、「地域で同じような考えがあるのかどうかも気になる」という他の参加者の意見も聞いてみたいというコメントもあった。

回答 8　「あなたが住んでいる地域」といえば、どのような範囲ですか

「あなたが住んでいる地域」の回答について、熟慮の段階で回答の得られた 50 件を対象に解析したところ、最も多くの参加者が選択したのは「〇〇市の範囲」で、全体のほぼ 1/3（34%）の参加者がこのエリアを選択していた。その後、「〇〇町の範囲」（24%）、「町内会（自治会）の範囲」と「小学校区の範囲」（12%）と続いた（その他は、「東播磨地域の範囲」（10%）、「中学校区の範囲」（2%）、「その他」（6%）、「となり近所の範囲」（0%）であった）。属性で評価したとき、特徴的な結果が見られたところがある。「町内会（自治会）の範囲」を選択したのは 50 名中 6 名であったが、1 名は大学生であり、その他の 5 名の参加者はすべて社会人という結果であった。この点については、年代によって捉え方が異なるようであった【図 2-1-10】。

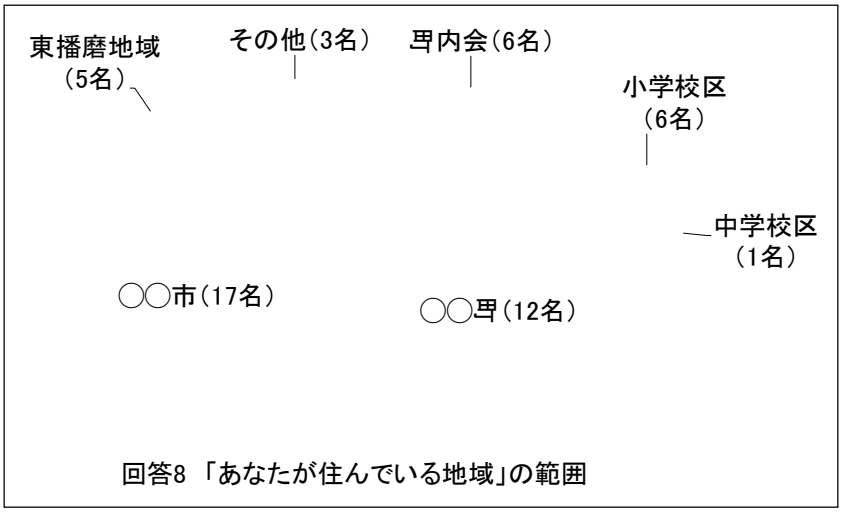

図 2-1-10

回答 9　今住んでいる地域への「愛着度」はどのくらいですか？

回答 9 は居住している地域への愛着度について、愛着度が強い（慣れ親しんでいる場所）の「10」から愛着度の弱い（生活するための場所・特に理由がない）の「1」までを設定し、参加者に数値で回答を求めた。回答 9 を回答した参加者（熟慮の回答数のうち回答のあった 50 件を対象）について、1 から 10 までの 10 段階のうち最も多かったのは「8」、ついで「7」、「10」の順であった。一方で、少なかったのは「1」「2」「4」、ついで「3」の順であった。おおよその参加者はどちらかというと、地域に対する愛着度が強い傾向にあることが伺える。また、回答 9 について、回答の大半を占めていたのは高校生や大学生であったが、年齢などによる属性の違いは特に認められなかった【図 2-1-11】。

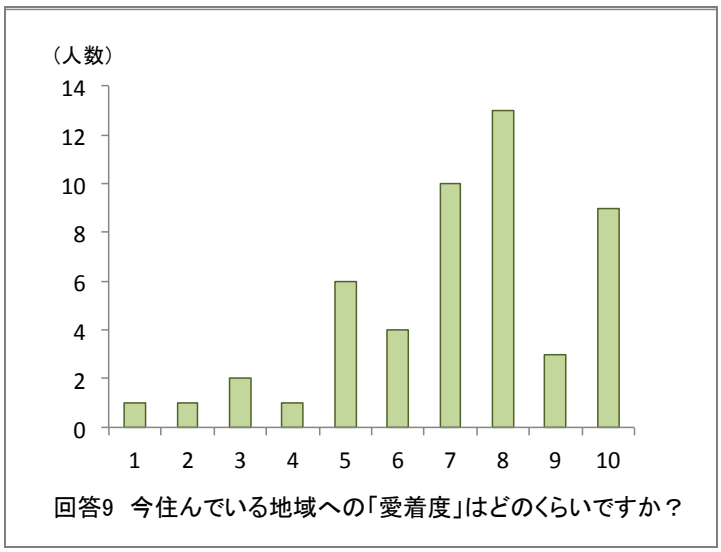

図 2-1-11

回答 10　あなたにとって「安心して暮らせる地域」とはどのようなものですか？【図 2-1-12】

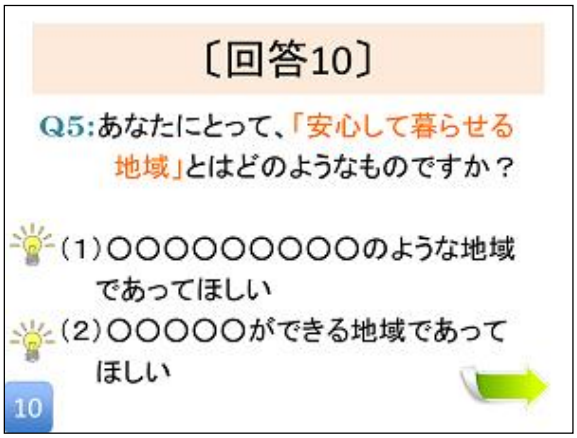

図 2-1-12

回答 10 では、あなたにとって安心して暮らせる地域とはどのような地域であるのかという点について意見を求めた。「周りの人とコミュニケーションが取れて挨拶のできる地域であってほしい」にあるように、住民間のコミュニケーションや地域での交流が必要であるといったキーワードが多く見られた。具体的には、「災害有事の際に共助ができる地域」「世代間交流で子供たちと高齢者との相互理解と協力体制」といった意見であり、地域コミュニティの重要性が伺えた。防犯や防災が充実して犯罪のない地域、公共交通アクセスが充実した地域、交通事故や事件が少ない地域など、回答 6 や回答 7 にあったように安全な生活を脅かすもののない地域という意見も多くあった。また、「子どもたちが未来に希望が持てる地域」「遠くに就職しても、また帰ってきたいと思える地域」のほか、「今居住している町内会」が安心して生活できる地域であるという回答もあった。

回答 11 (1) 安心して暮らせる地域にするためには？地域としてどんなことをしたらよいと考えますか？【図 2-1-13】

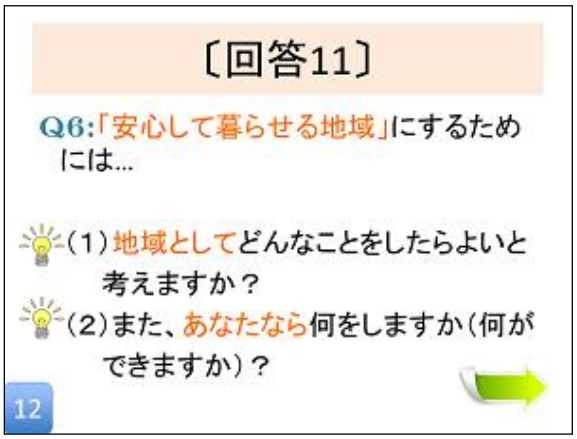

図 2-1-13

回答 7 において、「安全でない」「安全が感じられない」ことに対する解決方法や対策案について意見を求めたがその時の回答 7 では、個人としての意見、個人としてどのように対応していくのかという視点で意見が出されていたように感じる。一方で地域として出来ることにも共通した意見があったように思われる。ここの設問では、その点を含めて地域としての対応、例えば地域住民同士の関わり、近所付き合いの強化、地域での交流の場を増やすといった住民間の交流に意味があるのではないかと考えられている。また、防犯対策や防災対策、交通マナーの改善も必要である。地域として考えた時、「その地域の誇れるものをもつ」「自分の住む地域に興味や関心をもつ」「地域に安心して集える場所（サンクチュアリ）をつくる」このようなことが安心して暮らせる地域につながるのではないかという意見もあった。

回答 11（2）安心して暮らせる地域にするためには？あなたなら何をしますか（何ができますか）？

自治会活動やイベントなどの地域活動、地域守り隊などのボランティア活動に積極的に参加する。このことが地域やコミュニティを知るきっかけとなる。地域活動の参加、声かけや挨拶、散歩を通じたきっかけづくりなども地域に暮らす住民の顔が見えてくるのではないかと考えている参加者が多い。また、回覧板などで地域の様々な情報を共有することも地域での安心した暮らしにつながると考えられる。一戸一灯、地域パトロールや挨拶運動は防犯面の強化につながり、地域のハザードマップを作成することは地域防災という側面からも重要である。学校単位で行えることとして、生徒会を通じた交通安全の呼びかけ、交通マナーやルールを守ることを訴えていくことも出来るのではないか。このほかの意見として、個人の意識として、自分自身がルールを守ることを心がけ、地域のことを考えていくことも必要であるという点も挙げられた。

2.　安心して暮らせる地域とは（熟慮の成果）

熟慮の段階とは、実際に参加者が集って議論に至るまでにテーマについて参加者が各自で調べ、考えるという機会である。今年度は、特に安心・安全というテーマについて兵庫大学のウェブページを用いて熟慮を実施した。加古川地域のちから～安心・安全を創る～を考えていく上で、地域とは何か、安心・安全とは、また安心して暮らせる地域について考える段階まで自身の考えを整理していただいた。

安全とは、人とその共同体への損傷、ならびに人、組織、公共の所有物に損害がないと客観的に判断されることである。安心とは個人の客観的な判断に大きく依存するものであり、人が知識や経験を通じて予測している状況とは大きく異なる状況にならないと信じていることであると示されている（「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会」報告書、文部科学省、2004 年）。すなわち、安全・安心な社会の構築のためには、目指すべき安全・安心な社会のイメージを明確にすることが必要となってくる。今回の参加者の皆さんが持っている安全や安心のイメージとして、自然災害、交通マナー、防犯対策が多く挙げられていた。安心は個人の客観的な判断に依存するところが大きいわけである

が、加古川地域で生活する住民、つまり本熟議の参加者においては、年齢などの属性に関係なく、同じテーマをイメージして持ち合わせているものと思われる。また、安心して暮らせる地域にするために、個人や地域で行えることとして意見に挙げられたのが、住民間のコミュニケーションや世代間の交流であった。特に、回答 1 で見られたように、住民による地域間の問題解決に向けた議論、コミュニケーション、解決に向けた行動が加古川地域の「ちから」であると考えている参加者が非常に多く、世代を問わず見解は共通していた。

本論から外れるが、健康づくりにおいて身体を動かすことの必要性は周知の事実である。また最近、健康を維持する上で「ソーシャルキャピタル」の重要性が謳われている。いわゆる、社会の絆や結束から生み出される資源が「ソーシャルキャピタル」と考えられているが、健康は個人として維持するだけではなく、地域の人々とのつながりも健康を守ることにつながっている。すなわち、住民同士の問題解決によって生まれる結束が地域の社会環境を改善していくのである。

交通マナーというテーマにおいては、世代間で問題に対する捉え方が異なること点も見られ、熟議の場において課題が解決されることが期待される。安心して暮らすために地域として取り組めること（回答 11）においては、「犯罪の抑制力を高める」や「監視カメラを設置する」といった意見と、「地域で話し合える仕組みづくり」や「住民同士のつながり」という意見がそれぞれ挙げられており、互いの議論によって地域としての解決策を見出すことにつながる展開が予測される。

（木下幸文）